自著紹介

『ベトナムの障害者と発達保障』

教育学部准教授　黒　田　　学

ベトナムと聞いてどのようなイメージを持たれるだろうか。ベトナム戦争、ベトちゃんドクちゃん、枯葉剤。あるいは、ベトナム雑貨、「アオザイ」（伝統衣装）、「生春巻き」、しゃれた「民芸品」などなど。観光に出かけたいと思う人もおおいだろう。

大学に入学した20数年前、ベトナムを訪問し調査研究をすることになろうとは夢にも思わなかった。幼い頃のベトナムの記憶は、連日報道されるベトナム戦争（1960～1975年）であり、戦乱に逃げまどう子どもや女性の姿が脳裏に焼き付いている。大学生になって、中村梧郎さんの書かれた『母は枯れ葉剤を浴びた』を読んだことで、ベトナム戦争時に米軍によって散布された枯れ葉剤がベトナムの人々だけでなく、参戦した米軍兵士やその子どもたちに大きな被害を与えたことを知った。その惨状をいつか自分の目で確かめてみたいという思いが芽生えたが、その気持ちはしばらく離れていた。今のように大学生が観光で訪問できるような状況ではなかったし、日本からベトナムへの直行便もなかった。

その後、10年ぐらいの月日を経て、ベトナムをはじめて訪ねた。1994年8月、それから14年、これまでに30回近く訪問している。訪問するたびに変化する新しいベトナムに気づきながら、他方で70年代の大阪のような何かしら懐かしい感じさえする。初訪問は、藤本文朗先生（当時滋賀大学教授、現名誉教授）に連れられて、ホーチミン市郊外に住む学校に行けない障害児と家族への訪問調査、日本ベトナム友好障害児教育福祉セミナーに参加するためだった。まだ大学院生で、研究者生活はこれからという頃だった。

ベトナム戦争が終結して20年近く経過していたが、米軍によって散布された枯葉剤の影響が心配されていた。実際、ホーチミン市にあるツーズー病院・平和村には、思春期を迎えた「ベトちゃんドクちゃん」だけでなく、枯葉剤の影響と思われる障害児がたくさんいた。もちろん、枯葉剤の影響ばかりではない。先天的な障害や栄養不良、疾病などにより障害をもった子ども、たくさんの障害児が学校に行くこともできず在宅の生活を余儀なくされていた。現在では障害児の就学率が少しずつ伸びてはいるが、枯葉剤の影響は、今も続いており、ツーズー病院・平和村には幼い子どもたちがたくさん生活している。

さて、本書は、このような訪問の軌跡、ながらく続けてきた調査研究をまとめたものである。ホーチミン市およびハノイ、フエなどの都市を中心に、現地の障害者施設や学校を訪問し、関係者からの資料収集やヒアリング調査を行ってきた。また、障害者の家族を訪問し生活実態調査にも幾度か取り組んできた。これらの調査研究をベースにして、ベトナムの障害者施策の動向を整理し、さらにアジア太平洋地域の発展途上諸国における障害者の権利保障に向けた課題を考察している。その際に日本における障害児教育・福祉の実践と理論研究から生まれた「発達保障論」を基軸にして、日本の役割とアジアにおける国際協力のあり方を提起している。

是非ご一読いただければ幸いである。